ゲーテ『西東詩集』における文化受容と翻訳について

大杉 洋

ゲーテは1814年、はじめて中世ペルシアの詩人ハーフェズの詩をドイツ語訳で読んだ。この時、ゲーテは65歳になっていた。ハーフェズの詩集との出会いに先立つ数年間において、彼は親しく付き合っていた人たち、すなわちヘルダー、シラー、アンナ・アマーリア王妃、母親等と死に別れ。自分自身も老齡を意識し始めていた。が、この書物に深い感銘を受け、ゲーテが1819年に出版した『西東詩集』においてみられる言葉づかいは、きわめて生き生きとしている。中世オリエント文学との邂逅を通じて詩人ゲーテは若返った、と言っても差し支えないだろう。本稿では、この詩集において見てとることができる文化受容と翻訳に関する問題について、以下の3つのテーマを取り上げて述べてみたい。

1. オリентへの「逃亡」

『西東詩集』冒頭の詩「遁走」においてすでに、詩人のオリентに対する熱い想いが歌われている。

遁走

北も西も南も裂ける、
玉座は砕け、国々は震える、
逃れたまえ、きよらかな東方で
族長の気を味わうため、
愛し、飲み、歌い、
キーゼルの泉で若返るのだ。

その純粹と正義の地で、
わたしは人間という種族の
奥深い根源に迫るのだ、
神から天の教えを、なお
大地のことばで受け取り
頭を悩ますこともなかった、かの地で。

当時のヨーロッパ世界も、さまざまな分野において、長い歴史と伝統を抱えて疲弊していた。その行き詰まりを打開しようとするかのように、フランス革命が起きたが、それに続くナポレオン戦争はヨーロッパ全土を混乱に陥れてしまった。詩「遁走」においては、このよ

うなヨーロッパの現状を踏まえ、中世オリエントの叡智によりどころを見出そうとする詩人の姿勢がうかがえる。

行き詰まったヨーロッパ世界の外に、可能性を見出そうとする試みは、ゲーテの青年時代においても見られる。シュトゥルム・ウント・ドラング期のゲーテの関心は新大陸アメリカに向けられていた。ゲーテは、疲弊したヨーロッパに代わって理想の国家がアメリカに建設される可能性を見出していた。が、そのアメリカ観は時代の進行とともに変容していった。その過程は、小説『ヴィルヘルム・マイスター』のなかで描かれている。

ゲーテの生きた時代は、近代ヨーロッパの胎動期に当たり、科学技術の発達を背景に、しゃかいのさまざまな領域において目まぐるしい変化が進行していった。これまでの伝統に根ざした価値観が役に立たなくなった一方で、それに変わるものは確立されておらず、人類の行く末を見通すことは不可能だった。ゲーテは若いときには、新大陸アメリカの未来において理想の国家が建設される可能性を感じた。そして自分の晩年を意識しはじめ、ハーフェズの詩集と邂逅したゲーテは、中世オリエントに精神的「逃避」の場を見出したのである。

『西東詩集』におけるオリエント賛美は、熱い想いの伝わる言葉づかいで綴られている。が、当時のゲーテがヨーロッパに対してすっかり背をそむけてしまった、と見なすのは一方的すぎる見方だろう。事実、小説『ヴィルヘルム・マイスター』における、新大陸アメリカに関する記述においては、執筆年代が下るにつれて、アメリカへの期待が徐々に薄れ、逆にヨーロッパの伝統的文化遺産を活用することの重要性が説かれていく。ゲーテは、詩人である自分を刺激してくれる題材はためらうことなく吸収した。が、自分自身の存在の地盤を揺るがせることはしなかったのである。

2. 「ズライカの書」

『西東詩集』成立のもうひとつの大きな契機となったのは、マリアンネ・フォン・ヴィレマーとの恋愛だった。1814年、ゲーテはヴァイマルから自分の故郷であるライン河畔に旅行した折に、マリアンネとはじめて出会った。ヴァイマルに戻った後、将来『西東詩集』に収められることとなる詩が次々と生まれた。ハーテムと恋人ズライカの詩のやりとりからなる「ズライカの書」は、こうしたゲーテとマリアンネの恋愛を背景としている。愛しあう男女の対話形式からなるこの詩集においては、中世オリエントと近代ヨーロッパが時空を超えて呼応しあっている。そこには、愛の普遍的なあり方、言わば恋愛の原現象（Urphänomen）を垣間見ることが出来るのではないだろうか。

例えば、以下の詩句においては、詩人は恋人を想う気持ちが自然の情景と呼応しあい、至るところに恋人の姿を発見している。

数えきれない姿のなかに、君は隠れるかもしれない、
だが、最愛のひとつよ、僕にはすぐ君だと分かるのだ。
君は魔法のヴェールで身を包むかもしれないが、
遍在するひとつよ、すぐに僕は君を見分ける。

糸杉がきわめて清らかに若々しく伸びゆくさまに、
美しく成長したひとよ、すぐに僕は君を見分ける。
運河の清らかな生き生きとした波の動きに、
心をくすぐるひとよ、僕は君であることがよく分かる。(FA , Bd. 3/1, S.101)

1815年8月に、ゲーテはヴィレマー家を訪問し、マリアンネと再会した。その後で、「ズライカの書」におけるハーテムとズライカの対話形式の詩が創作されたが、その創作にはマリアンネも加わっていたことが知られている。

ズライカ

冗談はよして！ 惨めになるだなんて。
愛は私たちが豊かにしているではありませんか。
あなたをこの腕に抱きしめれば、
いかなる幸福にも私の幸せは匹敵します。(FA , Bd. 3/1, S.76)

この詩集では「遠」と「近」のモチーフが印象的に用いられている。遠く離れた恋人に想いを寄せて詩人が口ずさむとき、時間的、空間的な隔たりが解消されるのである。

また、「ズライカの書」には有名な「ギンゴ・ビローバ」の詩がある。日本から伝来した銀杏の葉の形が、心をひとつにして愛しあう二人の形姿を彷彿とさせる。

ギンゴ ビローバ

東方伝来でわたしの庭に
ゆだねられたこの樹の葉は、
秘密の意味を味わわせて
知者のを喜ばせる。

この葉は二つに別れた、
一つの生きものなのか？
それとも、一体であると認められるほど
たがいに選りあった二つの存在なのか？

この問いに答えようとして
私は正しい意味を見つけた、
わたしの歌々を聞いてあなたは感じないのか、
わたしは一にして二重なのだと？

3. 「注と論考」における翻訳に関する考察

『西東詩集』をよりよく理解するための注と論考」(Noten und Abhandlungen zu besserem Verständnis des West-östlichen Divans)においては、ゲーテの翻訳に関する興味深い知見を見出すことが出来る。

「ハマールについて」の章において、ゲーテは、ハーフェズの詩集をドイツ語に翻訳したハマール (Joseph von Hammer-Purgstall, 1774-1856) への惜しみない感謝の念を表明している。そして、翻訳によってオリエントの文学が紹介されることは、時代の要請を満たすものであることを指摘している。また、ゲーテは、いかなる分野においても、その道を歩んでいくなかでは、同時代人の協力が何よりの助けになる、と述べて翻訳者ハマールを讃えている。ゲーテは、「現在」が何よりも重要であることを繰り返し言っているが、この章における発言にもそのようなゲーテ的ものの見方がうかがえる。

「翻訳」の章において、ゲーテは翻訳を3つに分類して述べている。

第一段階の翻訳は、我々の感じ方、考え方で異国を知るのに役立つ。簡潔な散文が、これに最も向いている。(FA, Bd. 3/1, S.280)

散文は、それぞれの文芸の固有性を解消してくれる。そして、異国の文化を誰にでも分かる語り口で伝達してくれる。それ故、異国文化受容のはじめにおいては、散文の果たす役割が大きい、というのがゲーテの考えである。ゲーテは、代表例として、ルターの聖書翻訳を挙げている。

それに続く第二の時期においては、自分を外国の状況に置こうと努めるが、ほんとうは異国の感覚をわがものにしようとするだけであり、それをまた自分の感じ方で記述しようとする。そのような時期は、きわめて正確な意味において、パロディー的時期と名づけることができる。(FA, Bd. 3/1, S.280)

第二の時期の例として、ゲーテは詩人ジャック・ドリールをはじめとする同時代のフランス人たちを挙げている。フランス人たちは、異国の文化を受容する際に、自国の文化で培われた代用品を必要とする、と。また、ドイツにおいてはヴィーラントの翻訳が、第二の時期に属するものとして紹介されている。

我々は翻訳の第三の時期を体験した。それは、翻訳における最高次にして究極の時期と呼ぶことができる。すなわち、この時期においては翻訳を原文に等しい (identisch) ものにしようとする。その結果、一方が他方の代わりとなるのではなく、一方が他方の置かれたところで通用するのだ。(FA, Bd. 3/1, S.282)

この第三の時期において、翻訳の原典に対する忠実度は極めて高くなる。この場合の問題点として、ゲーテは翻訳者が自国の文化の独自性を多かれ少なかれ、諦めざるを得ないこと、また、読者も、未知の文化を受容することができるために、教養を高めなければならないことを説いている。ハーフェズの詩をドイツ語に翻訳したハマーは、この第三の時期に属している。

ゲーテは、上述した三つの時期がいかなる文学においても繰り返されるものであることを指摘した上で、自分たちは第三の時期の翻訳を推し進めるべき時であると主張している。

第三の時期の翻訳、ゲーテの言葉を借りれば、「一方が他方の代わりとなるのではなく、一方が他方の置かれたところで通用する」翻訳というものは、理論上は想定できても、現実を実現することは不可能と言ってもよいのではなかろうか。とくに、ヨーロッパの言語で書かれた詩の韻律を日本語の翻訳で再現することは不可能である。

とはいえ、ゲーテが三種類の翻訳が有する長所及び短所をわきまえつつ、翻訳を通じた文化交流をきわめて重視していたことがこの章から読み取ることができるだろう。

ゲーテの『西東詩集』においては、文化交流や翻訳を通じて、文化が生産的に、豊かになっていく様をいたるところで見出すことができる。また、そこから時代や文化の違いを超えて見えてくる人間存在の普遍的な相が浮かび上がってくるのである。

参考文献

本文中で引用したテキストは、Johann Wolfgang Goethe: Sämtliche Werke, Briefe, Tagebücher und Gespräche. I. Abteilung. Band 3/1. Hg. von Hendrik Birus. Frankfurt am Main 1994. を用い、FAの略号を用いた。

Abdel-Rahim, Said H.: Goethe und der Islam. Berlin 1969.

Bahr, Ehrhard: Die Ironie im Spätwerk Goethes. >>... diese sehr ernsten Scherze...<<. Studien zum >West-östlichen Divan<, zu den >Wanderjahren< und zu >Faust II<. Berlin 1972.

Becker, Carl: Das Buch Suleika als Zyklus. In: Studien zum West-östlichen Divan Goethes. Hg. von Edgar Lohner. Darmstadt 1971 (=Wege der Forshung 287).

Henckmann, Gisela: Gespräch und Geselligkeit in Goethes „West-östlicher Divan“. Stuttgart 1975.

Ileri, Esin: Goethes „West-östlicher Divan“ als imaginäre Orient-Reise. Sinn und Funktion. Frankfurt am Main und Bern 1982.

James Boyd: Notes to Goethe's Poems. Bd. 2. 3. Auflage. Oxford 1958.

Kommerell, Max: Gedanken über Gedichte. 4. Auflage. Frankfurt am Main 1985.

Korff, Hermann August: Der Geist des Westöstlichen Divans. In: Ders. Die Lebensidee Goethes. Leipzig 1923.

- Korff, Hermann August: Goethe im Bildwandel seiner Lyrik. Bd. 2. Hanau 1958.
- Krüger, Hans-Peter: Goethes Sprachstil im „West-östlichen Divan“. Hamburg 1958.
- Lemmel, Monika: Poethologie in Goethes west-östlichem Divan. Heidelberg 1987.
- Muller, Joachim: Lyrische Naturspiele in Goethes „Westostlichem Divan“. In: Goethe und die Wissenschaften. Hg. von Helmut Brandt. Jena 1984.
- Mommsen, Katharina: Goethe und die arabische Welt. Frankfurt am Main 2001.
- Mommsen, Katharina: Goethe und Islam. Frankfurt am Main 2001.
- Mommsen, Katharina: Goethe und Diez. Berlin 1961.
- Puritz, Hans: Goethe und Marianne von Willemer. Stuttgart 1948.
- Puritz, Hans: Marianne von Willemer. Berlin 1944.
- Schaeder, Hans Heinrich: Goethes Erlebnis des Ostens. Leipzig 1938.
- Stöcklein, Paul: Wege zum späten Goethe. Dichtung. Gedanken. Zeichen. Interpretationen um ein Thema. 3. Auflage. Darmstadt 1977.
- Wertheim, Ursula: Goethe und Hafis. In: Beiträge zur Literaturgeschichte und -methodologie. Gemeinsamer Studienband von Germanisten der Friedrich-Schiller-Universität Jena und der Alexander-von-Luca-Universität Jasi. Hg. von Horst Fassel, Klaus Hammer. Jena 1982.
- Ziolkowski, Theodore: Der Karfunkelstein. In: Euphorion. Bd. 55. Heidelberg 1961.